



「鍼灸」は「効果」があるのか？

文●関忠雄

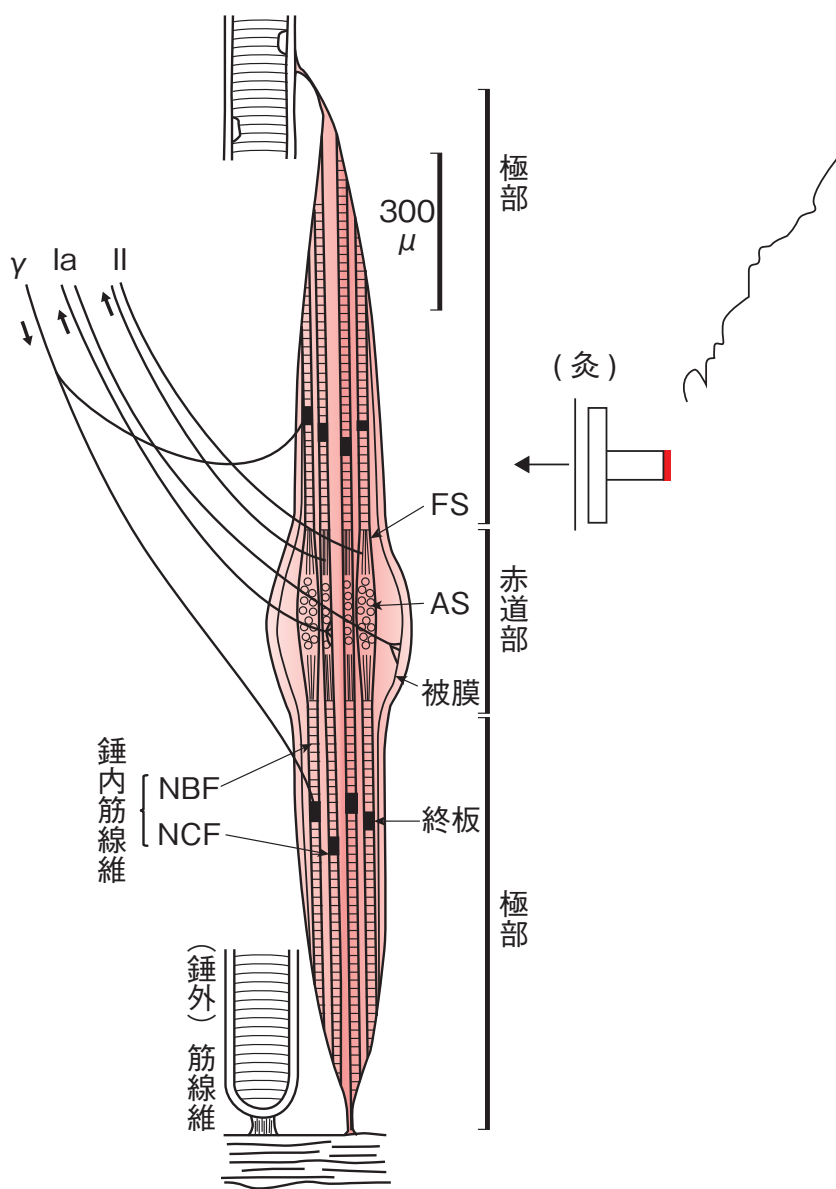
第6回 灸療法

灸療法の概要

灸療法は主に筋紡錘に温熱刺激を与えて緊張をほぐすものである。古代の人は多くの経験からヨモギから作られる「もぐさ」は、燃焼温度が低いが火傷を起こすことができることを知り、灸療法に活用してきた。現代の灸の学校では「もぐさ」は体への作用、燃焼速度、

温度、加工の容易さ、原料の調達など最適な素材だと教えている。しかし、「もぐさ」は低い温度で火傷を起こすことができるだけで、「もぐさ」という素材そのものに大きな意味はない。
筋紡錘は第Ⅰ度熱傷(発赤する程度の火傷)でも充分に伸展するの
で、以前は「もぐさ」の下に味噌をひいたり塩をひいたりする間接灸が

よく用いられてきた。肌に灸跡を残すことを嫌う人には「せんねん灸」のような間接灸がよいかもしれない。瘢痕(はんこん)火傷の跡を残す第Ⅱ度熱傷は火傷毒素を生じさせるので間接灸とは異なる。この灸の跡を残す方法は体内に火傷毒素を生じさせ身体の免疫力を高める。身体を丈夫にしたい人は多少の熱さを我慢してもこちらを薦めたい。



灸療法の原理図

間接灸の温熱効果

灸療法が鍼や指圧と最も異なる点は、その刺激が温熱刺激によることである。人体を上皮組織・結合組織・筋肉組織・神経組織の4つに分け、結合組織を体のさまざまに構造物や臓器のすき間をうめる組織とすると、間接灸をすすめるのはこの結合組織に発赤程度の第Ⅰ度熱傷を人為的に起こすことを意味している。

第Ⅰ度熱傷が起こると皮膚の毛細血管は緊張を失って拡張する。つまり、熱傷が血管や運動神経に影響を与えているのである。第Ⅰ度熱傷は数日で治癒し、瘢痕を残さない。間接灸は火傷の程度が軽く心地よい刺激である。

直接灸はごく浅いが第Ⅱ度熱傷を人為的に起こし、水泡・発熱・腫脹・湿潤をもたらす瘢痕を残す。

以前筆者は温熱効果という灸の基本的な効果を得ようとするならば、直接灸でなければならぬと思っていたが間接灸で充分であることが分かった。また間接灸は灸跡をつくることを好まない現代人の要請でもある。原理と異なるので

なければ、新しい方法を取り入れるのをためらう必要はない。

直接灸の免疫効果

①三里への直接灸

筆者が師事した倉島宗二氏は毎日三里へかなり大きな直接灸をしていた。直接灸は火傷によってできた火傷毒素(ヒストキシニン)が栄養分になって体が丈夫になるという。

戦争中に灸療法が盛んだったのは、栄養状態が悪く免疫力低下が原因の「結核」が死亡順位の上位にあったことによる。当時の社会条件では「結核菌」に対して体に抵抗力をつける以外に対抗する手段がなかった。鍼灸界の重鎮だった代田文誌氏や深谷伊三郎氏は灸療法が結核を予防するのに効果的であるということを経験から導き出していた。

戦争が終わって栄養状態が改善されると「結核」は急速になくなり、今では糖尿病や癌が問題になっている。灸療法の免疫学的研究が下火になってしまったのは世の中の問題意識が異なった所に移ったためである。いまだにヒストキシニンの研究は昭和15年で止まったままである。

②疣贅(いぼ)と灸療法

『現代針灸写真シリーズNo.4』(倉島宗二、医道の日本社、1993年)にはいぼについて次のように書かれている。「針の効果は不定であるが、灸治療は速やかな消褪(しょうたい)・症状がなくなることをみる症例が多い」「青年性疣贅には親いぼがある。最初に発生した一番大きな親いぼを選び、その直上へ米粒大のもぐさを20〜30壮すすえる。親いぼの消褪にしたがって順々に娘いぼも消褪する」とあった。自分も何例か試みたがほとんどのいぼは消えた。

皮膚科の本には「いぼの腫瘍組織に対するTリンパ球を中心とする細胞性免疫反応が、多数の腫瘍の自然消褪のもとだった」と書かれている(田上八朗『皮膚の医学―肌荒れからアトピー性皮膚炎まで』中公新書、1999年)。

皮膚科学は医学・生物学の進歩を反映する最先端の学問に変化している。その中でも「いぼ」の問題は腫瘍免疫と発癌の問題意識で考えられている。最新の皮膚科学での問題が、はるか以前の灸療法で考察されていたことであるとは驚きである。いまだに灸療法は意味を失っていない。



関 忠雄

Seki Tadao

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|----------------------|
| 1949年 | 長野県生まれ | 2005年 | 佐野動物病院にて獣医学を研修 |
| 1973年 | 中央大学法学部卒業 | 2006年 | 名古屋市れもん鍼灸接骨院院長 |
| 1978年 | 早稲田鍼灸専門学校卒業 | 2013年 | アルゼンチン(F・バレイラ)鍼灸院院長 |
| | 倉島宗二師に師事 臨床鍼灸学を研修 | 2016年 | アルゼンチン、ドイツ、日本(名古屋市)に |
| | 関鍼灸治療室を開設 | | レモンバーム・アカデミー開設 |
| 2003年 | 新潟大学医学部第一解剖学教室で末梢神経(自律神経:迷走神経)解剖を研修 | 2018年 | アルゼンチンから帰国 |
| | 研究題目「迷走神経と経絡との解剖学的相関について」 | | |